

国境観光コンテンツ発掘・創出のための事前調査

八重山・台湾の国境観光をつくる際、具体的にどんな内容を盛り込むことができるだろうか。両地域を訪れることによって体感できる国境らしさ、地理的に隣接しているのに国が違うことによって生じる文化の違い、今の国境が引かれる前に構築された文化の共通点、両地域の交流の歴史…。「国境」をテーマにした観光と一口に言っても、その材料には色々なものが考えられる。単体でも十分に観光魅力があるものから、ただ鑑賞するだけでは何の面白みもないもの（例えば記念碑）まで、両地域には大小様々なコンテンツが存在する。それらを実際に見て・体感して国境観光のコンテンツとして活用できるものを見つけていこうというのが事前調査の目的である。

調査には、九経調・島田のほか、対馬・釜山のモニターツアーを仕掛ける九州大学持続可能な社会のための決断科学センター・花松泰倫講師、中国語堪能で与那国町で台湾との交流記録の整理に携わっていた日本文理大学・舛田佳弘准教授の両名にも同行いただき、総勢3名での事前調査を実施した。

実施したのは2015年3月2日(月)から5日(木)までの4日間。2日の朝に福岡を出発し、那覇経由で石垣入り。石垣島・竹富島・西表島でフィールドワークを実施した後、翌3日の夜に那覇空港から中華航空を利用して台北入り。4日終日と5日午前中で台北近郊でのフィールドワークとヒアリングを実施し、5日夕方の飛行機で福岡に戻るという行程であった。本来であれば、八重山から台湾への移動は直行便を利用したいところであるが、中華航空石垣～台北便は2014年12月より冬期運休期間に入ってしまったため、今回は便宜的に那覇～台北便を利用した。なお、モニターツアー実施時には石垣～台北便を利用する予定である。

1日目 3/2(月)	福岡—(飛行機)—那覇—(飛行機)—石垣島【名蔵集落】…石垣島泊
2日目 3/3(火)	石垣島—(船舶)—西表島【ウタラ炭坑、由布島】—(船舶)—竹富島【竹富集落】—(船舶)—西表島—(飛行機)—那覇—(飛行機)—台北…台北泊
3日目 3/4(水)	台北—(バス)—基隆【原住民文化会館、和平島】—(バス)—九份【九份】—(バス)—台北【寧夏夜市】…台北泊
4日目 3/5(木)	台北【台北教育大学、沖縄県産業振興公社台北事務所】—(飛行機)—福岡

1日目(3月2日(月))

■福岡発那覇経由で八重山へ

出発当日の福岡の天候は曇り。予報によると八重山では天候に恵まれるものの台湾では雨の可能性が高いとのこと。荷物に折りたたみ傘を追加し福岡空港へ向かう。福岡から石垣へと向かう直行便は無いため、那覇を経由して石垣へ向かうことになる。福岡空港発 9 時 25 分、那覇空港着 11 時 15 分の JTA53 便でまずは那覇へ。目立った遅れもなく那覇空港に到着し、到着から1時間後の JTA609 便(那覇空港発12時15分、石垣空港着13時20分)に乗り継ぐ。福岡を出発して4時間で八重山に到着した。3月の八重山は修学旅行や卒業旅行など団体旅行で賑わっており、到着口には旗を掲げたツアーガイドが多く見られた。



まずは、予約していたレンタカーを借りるため空港近くのレンタカー店へと向かう(レンタカーは石垣島と西表島でも借りる予定にしており、いずれも花松先生が運転してくださった)。レンタカーを借り、まずは石垣島の中心部へ。市役所近くの八重山そば店「島そば一番地」にて、15 時過ぎに遅い昼食を取った。

■名蔵ダム近くにある「台湾農業者入植顕彰碑」

石垣島での目的地は市内中心部から離れた名蔵集落である。事前の情報によると、名蔵集落は台湾からの移住者が多く暮らしており、今でも旧正月を祝うなど、台湾との繋がりが残っているとのことであった。旧正月以外にも台湾との繋がりを感じられるようなコンテンツがあるのか、それを調べるのが訪問の目的である。

石垣市中心部から車で北上すること約 20 分で名蔵集落付近に到着した。名蔵交差点の周辺はサトウキビ畑が広がる石垣島の一般的な風景であり、日常的な景観から台湾との繋がりをを感じることはできない。しばらく車を進め、名蔵集落の隣、嵩田(たけだ)集落を訪れると、嵩田植物園近くの



道路脇に「台湾農業者入植顕彰碑」という小さな看板を見つけた。看板に従い車を進めると、名蔵ダムを見渡せる休憩スポットに辿り着いた。「名蔵ダム」と記された石碑の隣に、目的の「台湾農業者入植顕彰碑」が建てられていた。顕彰碑は 2012 年 1 月に建立されたばかりで見た目にも新しさが感じられた(良い意味での古さが感じられなかった)。名蔵ダムを一望できるこの場所はビュースポットとしての魅力を有している(ただし、八重山の魅力の一つである海は臨めない)。

顕彰碑の内容を見ると、80 年前に台湾のパイナップル生産会社が新たな生産地として石垣島へ渡り、名蔵・嵩田地区に 60 戸 330 人が入植したことが記されている。その中心的人物が林発(りんぱつ)という実業家であった。また、顕彰碑にはパイナップルだけでなく水牛を台湾から導入したことについても記されている。林発氏を中心とした台湾人入植者によって、八重山にパイナップルと水牛が持ち込まれたことが彼らの功績として記されていた。



顕彰碑によって、八重山と台湾を繋ぐキーワードとして「パイナップル」と「水牛」があることが分かった。パイナップルはいまやリゾート地である八重山には欠かせない果物であるし、由布島や竹富島では水牛車による観光が観光メニューの目玉となっている。ただし、市街地から離れたこの場所へ、ただ顕彰碑を見るだけに立ち寄るとするのは観光行動として現実的ではない。国境観光のコンテンツとしては、見せ方を工夫しないと成立しないと感じられた。

■数少ない台湾出身者が経営する「嵩田植物園」

車を戻し、顕彰碑へと続く脇道に戻り、嵩田(たけだ)植物園を覗いてみる。入口のゲートは閉められており、「毎週水・木曜日定休日」の看板が掲げられている。訪問日は月曜日であったため、閉じられたゲートの前で中の様子を窺っていると、従業員と思われる 40,50 代ぐらいの女性が顔を出してくれた。女性曰く、「今日はお客が来ないから店を閉めてしまった」らしい。たしかに、広い駐車場には我々の車以外は駐車しておらず、目の前の道路を通過する車もまばら、訪問した時間が 16 時近かったことを考えると、早仕舞いした理由も納得できる。結局、植物園を再び開けてもらうことはできなかったが、対応してくださった女性から色々話を聞くことができた。

女性はこの植物園のオーナー一家であるという。女性の一家は台湾からの入植者であり、祖父は林発氏と一緒に台湾から八重山に移り住んだ中心メンバーの一人だそうだ。女性は石垣生

まれであるが、祖父と父は台湾生まれであり、父はこの地域で数少ない台湾出身の生き残りとのこと(林発氏らの八重山移住は80年前のことであり、この地区に住んでいる台湾出身者はほとんど亡くなってしまった)。創業者である祖父は林発氏の片腕的存在としてエピソードが豊富で、祖父を題材にした映画ができるとのことであった(ただし、詳細確認できず真偽のほどは不明)。

この女性は話し好きで話も面白い。聞くと、台湾出身者の数少ない生き残りとして父に取材の依頼がよくあるそうだが、父が取材を受けたがらないため、彼女がかわりに話すことも多いのだそうだ。彼女自身は、石垣生まれであるものの台湾の血が入っているために幼少時代はいじめられることもあったそうで、小さい頃は台湾と関係があることを嫌がっていたそうである。しかし、学生時代に台湾政府に招待され、生まれて初めて自分のルーツである台湾を訪れた(台湾政府が世界各地の台湾出身者を一堂に集め、何か大きなイベントを開催したようである)。そこで出会った台湾の人々、彼らの文化等に触れ合ったことで、それまで台湾人であることを嫌がっていた思いが、台湾人であることを誇りに思えるようになったそうだ。

このように、自身の体験談も交えて八重山と台湾の繋がりを当事者の視点から話せる存在は、国境観光のコンテンツとして貴重である。前述した顕彰碑も、当事者の話を聞くことでリアリティが増し、見るだけの価値が生まれるのではなかろうか。なお、顕彰碑が建立して以降、この場所に台湾人観光客が訪れることは増えており、ちょうど植物園の入口が広い駐車スペースになっ



ているため、そこにバスを停めて団体客が顕彰碑を見に行くのだという。ただ、やはり顕彰碑を見るだけの現状は台湾人観光客にとっても不満が残っているようだ。一方、植物園としても、顕彰碑を見に来た台湾人観光客が植物園に立ち寄ることがないそうで、ただの駐車スペースとして使われている現状を「もったいない」と考えている。植物園には飲食施設が併設されており、ここでは特産の南国フルーツを使った生ジュースが楽しめるので(もちろんパイナップルジュースも)、例えば植物園でフルーツジュースを楽しみながら台湾からの移住の話を聞き、その足で顕彰碑を見に行くような行程であれば、顕彰碑と植物園双方の魅力が高まり、国境観光のコンテンツとしても十分に成り立つだろう。

■八重山有数のパワースポット「於茂登御主神」

嵩田植物園の女性に周辺の見所をレクチャーしていただき、植物園を後にする。植物園のすぐ近くには国立天文台VERA石垣島局があり、ここは日本最西南端のVERA観測局なのだそう。ちなみにVERAとは、VLBIという技術を用いて従来の100倍にも及ぶ高精度で計測し、銀河系の3次元立体地図を作るプロジェクトである。口径20mの電波望遠鏡を備えており、施設見学も可能なのだという。植物園の女性の話では、観測局に駐在スタッフも話し好きらしい。立ち寄ることを勧められたが今回は時間の都合で遠慮させていただいた。

観測局のさらに先には、知る人ぞ知る石垣島のパワースポットがあるのだという。「於茂登御主神」が祀られており、水の神様として知られているのだという。於茂登といえは島内にある沖縄県最高峰の於茂登岳との関連がイメージできる。於茂登岳自体が霊山として古来から信仰の対象となっており、この祠は於茂登の神様が祀られているのである。あいにく我々はスピリチュアルな



力を感じるアンテナが発達しておらず、その力をレポートすることはできないのだが、「於茂登御主神」をインターネットで検索すると、パワースポット好きの方々の訪問記がいくつも載せられており、そのパワーの凄さについて書かれている。祠の入口までは車で容易に行くことができるとのことであったので、我々も訪問してみた。

祠は森の中にあるものの、周りは近隣住民によってきれいに整えられている。また、祠の前を小さな川が流れており、周囲の木々と調和した景観も十分に観光魅力を有している。植物園や顕彰碑と同様に、語り部がいることで魅力的なコンテンツとなりうるだろう。

■「土地公祭」が行われる名蔵御嶽

名蔵集落には御嶽が複数あるものの、台湾との繋がりを感じることができるのは名蔵御嶽だけらしい。嵩田地区を後にし、再び名蔵地区へと車で戻ったのだが、目的の名蔵集落が見つからない。名蔵中学校のそばでゲートボールに興じるお年寄りを見かけ、名蔵集落の場所を尋ねると、サトウキビ畑の中を突っ切って行くことが分かった。ちなみに、お年寄り達は名蔵御嶽に行くことはほとんどなく、別の御嶽に行く方が多いのだという。舗装されていないあぜ道を車で進んでいくと、

森の入口に鳥居を見つけることができた。

鳥居の手前で車を降り、徒歩で森の中へと踏み入る。周りを木々に囲まれているところ、神様を祀っているところは於茂登御主神の祠と同じなのだが、於茂登御主神の祠が爽やかでな印象であったのに対し、名蔵御嶽は鬱蒼とした雰囲気漂っている。鳥居の先には広場と建物があり、建物の裏手を進むと一番奥に祠があった。建



物脇の解説を読むと、名蔵地区には名蔵御嶽のほかに水瀬御嶽と白石御嶽があり、名蔵三御嶽というらしい。

奥の祠まで一通り歩いてみるが、台湾らしさを感じるものは見当たらなかった。後日の調査で、「土地公祭」という祭が旧暦8月15日に行われており、この日だけは御嶽が台湾色に染まることが分かった。土地公祭は中華圏で広く信仰されている「土地公」に祈りを捧げる儀式で、豚をまると捧げる、紙銭を燃やす、爆竹を鳴らすなど中華的な儀式が名蔵御嶽でも行われている。ただし、こうした中華圏の文化が感じられるのは土地公祭の時だけであり、台湾出身者が多く暮らしている名蔵集落においても、日常的に台湾文化を感じられるようなものは見つからなかった。

■竹富町役場での意見交換

夕方は石垣市の中心部に戻り竹富町役場を訪問。企画財政課の小濱係長、商工観光課の通事係長と意見交換を行った。意見交換の中で、八重山と台湾の関わりが感じられる要素として「炭坑」「食」「音楽」の大きく3点が挙げられた。まず、一般的に沖縄のイメージには無い炭坑であるが、八重山・台湾両地域に炭坑があり、現在も炭坑跡が残っている。繋がりとして特筆すべきは、八重山の炭坑では台湾人の坑夫が、台湾の炭坑では沖縄人の坑夫が働いていたという点である。次に食であるが、両地域に共通の食材として先に挙げたパイナップルのほか猪なども考えられる。共通の食材が両地域でどのように料理方法が違ってくるのかを味わうのも一つのコンテンツになるかもしれない。最後



の音楽であるが、沖縄県の中でも本島と八重山の音楽は異なっている。ルーツを辿ればいずれも大陸渡来の文化であるが、本島の文化が大陸から直接伝わったのに対し、八重山の場合は台湾経由で伝来した歴史があり、その結果として八重山と本島の音楽の特徴は異なるようだ。

また、八重山と台湾の繋がりを研究する人物として八重山毎日新聞の松田良隆記者と元琉球新報社副社長の三木健氏をご紹介いただいた。筆者は、国境観光ツアーを成功させるためのポイントの一つが、優秀なガイドがいるかどうかにあると考えている。国境観光のコンテンツは、一見すると観光魅力が乏しいものを、両地域の共通点や違いを比較するといった従来の観光とは違った切り口で見ることによって新たな魅力を見出すことを目指している(もちろん、そうした工夫をせずとも単体で十分に観光魅力を有するコンテンツもあるが)。そういった意味で、両地域の文化に精通し、それを旅行者の関心にあわせてガイドしてくれる存在は非常に重要な役割を担っているものと思料する。

役場での有意義な意見交換を終え、今夜の宿泊先である東横イン石垣島へと向かった。翌日は八重山の離島めぐりを予定しており、石垣港に近いホテルを予約した。八重山の海上交通は石垣港が拠点になっており、一部の離島便を除けば大部分が石垣港発着である。国境観光ツアーの行程を検討する際は、大人数の団体であればチャーター船を活用するという選択肢もあるが、基本的には定期船の時間にあわせて移動する必要がある。

2日目(3月3日(火))

■台湾との繋がりを感じさせる「ウタラ炭坑」

朝から小雨が降る石垣港を8時に出港し、40分後には西表島西部の大原港に到着。そのままレンタカーの送迎車に乗り込み、9時前にはレンタカー店を出発した。最初に目指するのは島北部・浦内川の近くにあるウタラ炭坑跡。ここは前日に竹富町役場でアドバイスいただいた八重山・台湾の共通点の一つ「炭坑」であり、経済産業省の「近代化産業遺産群」にも認定されている。

レンタカー店を出発した直後に雨脚が強くなり、しばらく雨中のドライブとなった。この後、目的地までは道なりにひたすら走るのであるが、雨は船浦海中道路を横断している途中にピタッと止み、出発から約1時間でウタラ炭坑の入口にあたる浦内川クルー



ズのスタート地点へ到着した。ここで車を止め、クルーズが行われる川沿いの遊歩道を歩いて炭坑跡へと向かう。炭坑までの遊歩道は約 1km で、徒歩 20 分であることが案内板に明記されていた。遊歩道が整備されているとはいえ、ほとんどの部分は手つかずの状態であり、雨が降っていた影響もあってか地面は水たまりが多くぬかるんでおり歩きにくい。足を滑らせれば川に転落してしまうおそれもあるが、転落防止の手すりが用意されている区間はごくわずかであった。遊歩道の幅が狭いので団体で歩くには難しく、また足腰に自信のない高齢者にとっては危険なルートであると感じた。

案内板の時間どおり約 20 分で炭坑跡へと到着。炭坑跡が臨めるスポットはウッドデッキで整備されており、炭坑の歴史などが紹介されている案内板も設置されている。先客が 3 人おり、どうやら男女カップルとツアーガイドという組み合わせのようである。ライフジャケットを着用していることから、カヌーで訪れたのだろう。案内板の説明によると、炭坑は 1936 年に開坑され、太平洋戦争の開戦直後の 1943 年には事業停止したとのことであり、実質稼働したのは 10 年にも満たない。しかし、その間に多くの坑夫が集められ、その中には台湾北部の産炭地から連れてこられた坑夫もいたようである。現在の炭坑跡で見ることができるのは、トロッコのレールを引き込んだレンガ柱の遺構だけである。



純粋な炭坑跡としての見所は少ないものの、レンガ柱にガジュマルの根が絡まっている様子や道中のマングローブ林は十分に観光魅力を有している。遊歩道を歩かずにカヌー体験と組み合わせるとコンテンツ化すれば、国境観光ツアーのメニューの一つにできるのではなかろうか。

■その他の台湾との繋がり「猪料理」「水牛車」

午後は島西部に戻り、西表島から水牛車で訪れる由布島を訪問する。レンタカーで元来た道を引き返し、12 時前に由布島周辺へと戻った。ただし、行きと同じく船浦海中道路を越えた辺り

から天候が急変し大雨が降り始めたため、まずは昼食を取ることにする。昨晩に竹富町役場でアドバイスいただいた八重山・台湾の共通点の一つである猪料理が食べられる「猪狩家(かまいとうやー)」は、ちょうど由布島へと渡る水牛車乗り場近くに店を構えていた。ちなみに、店主の高田さんは台湾出身とのことである。

猪の焼肉と八重山そば、ご飯がセットになった「猪狩家定食」(1,500 円)を注文する。メニューを見ると、猪料理はその他にも猪そばや猪チャンプルー、猪汁などもあるようだが、これらは猪を捕ったときのみの限定メニューであり、今日食べられる猪料理は注文した定食のみであるとのこと。おそらく焼肉に使う猪は冷凍なのだろう。今回食べた猪肉は残念ながら食感が硬く臭みが



残っており、それほど美味しいものではなかった。ネットの口コミを参照すると、その他の猪料理は「臭みが無く美味しい」という評価を多く見かけたため、メニューを選べば十分に満足できる料理が食べられるのではなかろうか(同行したメンバーは八重山牛を使った牛丼を食べていたが、美味しかったそうである)。また、この店では黒糖づくり体験が楽しめるらしく、黒糖づくりの様子を見学に来た老夫婦を見かけた。猪料理をはじめ、食材は西表島で採れたものを豊富に使っており、黒糖づくり体験もあわせて国境観光ツアーの行程に組み込むことは有効であろう。

昼食を食べ終わる頃、タイミング良く雨が止んだため、由布島行きの水牛車乗り場へ向かう。水牛車は 30 分おきに出発するらしく、ちょうど出発間際であった 12 時 15 分発の水牛車に乗り込んだ。雨が降っていたにもかかわらずお客は多く、12 時 15 分発は 2 台の水牛車に分かれて出発した。由布島は干潮時には徒歩でも渡れる島であり、ノンビリと動く水牛車に乗っても 15 分しか掛からない。島全体が観光施設となっており、徒歩でも入園料が発生する(徒歩の入園料は 600 円、水牛車は往復乗車料を含めて 1,400 円)。



由布島観光は、島までの移動である水牛車が一番の観光魅力であるが、島全体も亜熱帯植物楽園として観光施設化している。亜熱帯の植物や動物が鑑賞できるスポットであるが、島に着くとガイドが帯同し、半強制的に記念写真を撮影され、帰りの水牛車乗り場で写真販売が行われるという昭和のお仕着せの観光地スタイルが今も残っている。台湾との繋がりとしては先



述したとおり台湾伝来の水牛を使った水牛車観光であり、最初に台湾から連れてこられた「大五郎」と「花子」の功績を讃える石碑が由布島に建てられている。滞在時間 30 分で帰りの水牛車に乗り込む。帰りの運転手(おじい)は運転台から三線を取り出し、水牛を巧みにコントロールしながら八重山民謡の弾き語りをサービスしてくれた。

ゆったりとした水牛車の歩み、おじいの奏でる八重山民謡は、八重山らしさが感じられる魅力的な観光コンテンツである。台湾伝来の水牛を使った水牛車観光ということで、国境観光ツアーのコンテンツとしても成立する。ただし、同様の水牛車観光は竹富島にも存在するため、ツアーの行程に組み込むのはどちらか一方でよいのではないかと思料する。その場合、由布島での観光が魅力に乏しいため、個人的には竹富島の水牛車観光を選択したい。

その他、今回のフィールドワークでは訪問しなかったが、西表島における国境観光ツアーの有力なコンテンツとして祖納(そない)集落が挙げられる。昨年 11 月に行われた境界地域研究ネットワーク JAPAN(JIBSN)竹富セミナーでは、夜のレセプションが祖納公民館で開催された。レセプションでは、集落の女性陣の手作りによる伝統料理が振る舞われたほか、子どもから大人まで参加して様々な伝統芸能が披露された。まさに集落挙げてのもてなしであり、参加者は通常体験できない特別なイベントに参加することができた。こうした「通常は体験できないものが特別に体験できる」というコンテンツはツアーの魅力を大幅に高めてくれるものである。



■八重山独自文化が根強く残る竹富島

大原港でレンタカーを返却し、次の目的地である竹富島へ向かう。大原港から石垣港へ向かう船舶は現在、1日2便だけ竹富島を経由して運航している(大原港発14時は不定期、14時30分発は毎日)。我々は14時大原港発に乗り竹富島で下船した。竹富島でもあいにくの雨模様であり、常に傘を差して散策することとなった。夕方には石垣空港から那覇に戻り、夜のうちに台北入りする予定であるため、竹富島での滞在予定時間はわずか2時間、駆け足でのフィールドワークであった。

竹富島は周囲約9kmの小さな島であり、港から昔ながらの街並みが残る集落へは1km程度の距離である。観光客の多くは集落内にあるレンタサイクル店や水牛車乗り場まで送迎車で移動するが、滞在時間も少ないため徒歩で散策することにした。最初に立ち寄ったのは港近くにある竹富島ゆがふ館(竹富島ビジターセンター)である。ここは環境省が開設した竹富島の自然と伝統芸能・文化を紹介する施設であり、館内では展示品や映像を通して竹富島の自然・歴史・文化を学ぶことができる。国境観光ツアーを企画する上で特筆すべきは、八重山エリアで数少ない屋根付きの観光施設である点である。ツアー実施時に雨が降ると、どうしても屋内でのコンテンツは駆け足になってしまいがちで、屋根付き施設は時間調整の場として貴重な役割を担っている。展示内容は比較的一般的なものでとりたてて目を引くようなものではないが、こうした施設は旗持ちツアーに無くてはならないコンテンツであろう。

ちょうど雨が小降りになったところでゆがふ館を出て集落へと向かう。ゆっくり歩いて15分程度で集落の入口に到着した。朝から降り続く雨の影響で、集落内の人通りは少ない。集落内には飲食店や土産店もあるが、開いているのか閉まっているのかも分からないほど、賑わいが感じられなかった。しばらく集落内を散策していると、ようやく水牛車に遭遇した。集落内を散策する人がほとんど見られない一方で、水牛車は写真のとおり大賑わいである。この後、立って続けに水牛車とすれ違ったが、一様に乗客が多い様子であった。どうやら、雨が降っている影響もあり、観光客は徒歩やレンタサイクルではなく水牛車を選んだのだろう。ちなみに、由布島と竹富島の水牛車で最も異なる点は「運転手」ではないかと思料する。由布島の水牛車運転手が地元のおじだっ



たのに対し、竹富島では若い男女が目立った。竹富島の運転手は県外からの移住者もいるようである。ガイドの内容も、竹富島の方が運転手によって工夫している印象を受けた(由布島では島と島間の浅瀬を往復するだけであり、工夫の余地は少ないのかもしれない)。

竹富島では台湾との繋がりとして水牛車を見つけたが、国境観光ツアーのコンテンツとしては、台湾との繋がりをクローズアップするよりも両地域の独自文化を比較する方が魅力あるように感じた。そういった視点からいえば、今回は訪問できなかったが、同じく独自文化が残っている八重山の島として新城島も挙げることができる。新城島は竹富町内 8 つの有人島のうち唯一定期船が就航していない島である(西表島から歩いて渡れる由布島は除く)。観光客が島を訪問することは可能だが、島内で行われる祭事には今でも外部の人が参加するどころか見ることも許されていない神秘性を秘めており、手つかずの自然と昔のままの集落が今も残っている。チャーター船でしか訪問できないという点も特別な体験を求める観光客には魅力に映るのではないだろうか。

■八重山からいよいよ台湾へ

雨の影響もあり、2 時間の予定であった竹富島のフィールドワークは予定より 30 分程度早く終わった。16 時 30 分発の石垣港行きに乗船し、15 分で石垣港に到着。そのままレンタカーに乗り込み石垣空港へと向かった。本来ならば空港では沢山の八重山土産を買い込みたいところであるが、今回の行程は台湾まで足を伸ばすため、お目当ての石垣牛は買わずに那覇行 18 時 30 分発の JTA626 便に乗り込んだ。那覇空港には 19 時半前に到着。閉店間際の空港食堂へ駆け込み、最後の沖縄料理を堪能した。国内線ターミナルと国際線ターミナルは隣り合っているが、途中に屋根の無い部分があり、外は相変わらずの大雨であったため、移動にはターミナル間の無料シャトルバスを利用した。

国際線ターミナルに到着した頃にはすでに 20 時を過ぎており、国際線は我々が搭乗する台北行を残すのみのものである。それにも関わらず、チェックインカウンターや出国審査はどちらも長蛇の列であった。行列の顔ぶれをみると、最も多いのは沖縄帰りの台湾人のようであった。旧正月のバカンス帰りだろうか、家族連れが多く見受けられた。次いで多かったのが沖縄の学生で、これは台湾の学校との交流イベントのために団体で訪問するようであった。一方、スーツや作業着姿のビジネスマンはほとんど見られなかった。飛行機の乗り込むと満席に近い状態で、平日にもかかわらず大賑わいであった。那覇発 21 時 35 分の中華航空 626 便は定刻通りに出発し、1 時間の時差を加えて現地時間の 22 時 15 分に台北桃園空港に到着した。

台湾最大の空港であり中華航空とエバー航空のハブ空港である桃園空港は、夜間にもかかわらず多くの人で賑わっている。入国審査には大行列ができていますが、フル稼働の窓口と係員の誘導もありスムーズに流れ、1時間も掛からずに無事に空港の外に出ることができた。台北といえば夜市が魅力の一つだが、この日はタクシーで台北駅近くの宿泊先「力歐時尚旅館」へ直行、明日に備えてすぐに布団に潜り込んだ。

3日目(3月4日(水))

■台北近郊の港町・基隆へ

3日目は台北近郊でのフィールドワーク。同行いただいた舛田先生のアドバイスでは、台北市内では八重山との繋がりがや台湾独自の文化を見つけることは難しいとのことだったため、台北から日帰り訪問が可能で、原住民が暮らしていた基隆を訪問することにした。それにしても、八重山から台北に渡ると、その気温の違いに戸惑わされた。台北の緯度は沖縄本島よりも南に位置するのに台北は沖縄に比べるとだいぶ寒く、昨日の石垣島の最高気温が 23℃だったのに対し、今日の台北の最高気温は 14℃である。異なる気候の二地域を旅行するということは、体調管理に気をつける必要がありそうだ。

基隆行きのバスが出発する台北西バスターミナルまで、ホテルからは徒歩5分強。今日も変わらずの雨模様であるため、途中から地下街に潜りバスターミナルを目指す。案内板を見ながら地上に上がる出口を探していると、見知らぬ男性が日本語で「どこに行きますか？」と話しかけてくれた。基隆行きのバスに乗る予定であると告げると、たどたどしい日本語で出口を教えてくれる。台湾は親日国であると言われるが、身をもって感じられた瞬間であった。

台北西バスターミナルにはA棟とB棟があり、基隆行きのバスはA棟から出発する。台北と基隆を結ぶバスは頻繁に運行しており、我々が乗車した朝の時間帯は10分おきに発車していた。バスは一般的な路線バスではなく高速バス仕様で、車内モニターには朝のテレビ番組のニュースが流れ、座席はリクライニングが可能であり、片道30分の所要時間であったが快適に過ごすことができた。



■台湾原住民文化が残る「原住民文化会館」

10時過ぎに基隆に到着し、まずは観光案内所へ向かう。案内所には事務スタッフのほかにはボランティアガイドのお年寄りがあり、ガイドマップを探していると英語で話しかけてくれた。我々が日本人だと分かると日本語が堪能なガイドの方もついてくださったのが有難い。沖縄・八重山との繋がりを探していること、原住民のことが分かる所に行きたいことを伝えると、原住民のことは「原住民文化会館」に行けば色々な資料が展示されていること、沖縄との繋がりは「和平島」に行けば琉球漁民との繋がりを記念した像が建っていることを教えてくださった。幸いにも、バスで行くことのできる場所であり、しかも原住民会館から和平島までは徒歩でも行ける距離であるとのことである。移動には主要な観光ルートを運行する観光バスの利用が便利で、運賃は1日乗り放題で50台湾ドルと安かったため、これを活用して原住民文化会館に向かった。

原住民文化会館バス停から高台に歩くこと5分、目的の建物は古びた5階建ての建物であった。建物に入ると、施設の職員らしき男性が出迎えてくれた。入場は無料で、3階と4階の2フロアのみを展示スペースとして活用しているらしい。

エレベーターを降りると、さっそく原住民について解説されたパネルが目につく。外国人観光客の訪問は想定していないようで、解説は全て繁体字の中国語のみで表記されている。日本人であれば、並んだ漢字の雰囲気から何となくの内容は想像できそう。館内には、原住民が使っていた生活用品から衣装、住居を再現したものまで色々と展示されている。館内にはガイドはおらず、裸の状態で見られるものも多いことから、おそらくレプリカがほとんどなのだろう。

その中で目に付いたのが、写真の「拼板舟」と書かれた小舟である。説明文を読むと、木造の漁船として使われていたらしい。これと同じような木造漁船は沖縄にもあり、「サバニ」と呼ばれている。この他にも、沖縄でお馴染みの月桃の葉を使って編まれた



籠も展示されていた。つまり、台湾独自の文化について調べる中で、沖縄との繋がりについても見つけることができたのである。このように、独自の文化を持っている両地域で共通項を探し出していくというのも、国境観光の一つの楽しみ方になるのではなかろうか。ただ、訪問した原住民文化会館については、2フロアだけの展示物は内容的にもあまり充実しておらず、日本からわざわざ足を運ぶようなものではないだろうと感じた。

■沖縄との繋がりが記念碑として残る「和平島」

原住民文化会館の見学は30分程度で終了(急ぎの行程であることもあったが、なにより見所が少なかった)。そのまま徒歩で和平島へと向かい、20分弱で和平島公園に到着した。和平島公園は整備された海浜公園のようで、入口で入園料60元が徴収される。我々の目当ては、園内にある琉球漁民との繋がりを記念した像である。入場口の手前から像を見ることができないか



チャレンジしたものの、あいにく入場口の手前からそれらしきものを確認することはできなかつたため、諦めて入場料を支払い公園に入った。

入場して案内板を確認すると、この公園は非常に広大であることが分かった(帰国後、和平島公園をネットで検索すると、奇岩で有名な景勝地として人気が高いようだ)。しかし、生憎の雨天であり、見渡す限り我々以外の入場客は皆無のようである。案内板に記されている「琉球漁民慰霊碑」まで歩くこと5分、波が打ち付ける海岸沿いにお目当ての像は建っていた。

見た目からも慰霊碑はまだ建立して間もないことが分かる。ただ、周りに解説板らしきものが見当たらず、像が建っているだけで何を慰霊しているのかは皆目見当が付かない。随分と不親切な像だなあと思い裏側へ回ると、思いがけず裏側に解説が記載されていた。



「琉球ウミンチュの像建立の由来」と書かれた解説は以下のように続く。「1905 年頃から琉球人は基隆に移住し、その後 560 人も集落を形成した。台湾人は琉球人に居住地を提供し、対して琉球人は漁法・造船・漁具修理など漁業全般の技術を惜しみなく伝えた。台湾人と琉球人が共助し、兄弟姉妹の如く暮らした輝かしくも誇らしい史実である。戦乱と復興の中で、琉球集落は消滅したが、長い年月をかけ基隆市民は社寮島近辺(和平島)に散在していたスペイン人、オランダ人、先住民、そして多くの琉球人の遺骨を収集し、思い出と共に萬善公に祀ったのである。…(以下略)」。

「萬善公」がどこにあるのかが分からなかったのだが、帰国後に調べたところ、慰霊碑の手前に祠があったのだという(それとは気付かず、写真を撮っていなかったため、写真は琉球ウミンチュの像建立期成会のブログより拝借(<http://uminchuzo.ti-da.net/>))。どうやら、ここには約 3,000 人もウミンチュが祀られており、今でも地元の人によって大切に手入れされているらしい。雨中の



フィールドワークでは国境観光ツアーのコンテンツとしては魅力に欠けると判断したものの、慰霊碑と祠をガイド付きで訪問し、かつ公園内の奇岩鑑賞などもあわせて楽しむことができれば、十分な魅力を有しているのではないかと思料する。さらに、徒歩圏内の原住民文化会館も訪問することで、沖縄と台湾の繋がり探しを深化させることも可能である。

■日本人にも人気の観光地「九份」

雨が降り、海に面した公園は風も強い。慰霊碑から早々に切り上げて和平島公園を後にする。ちょうど昼時にさしかかり、次のバスまでの待ち時間が 40 分ほどあったことから、和平島公園の近くで軽めの昼食を取る。午後の目的地は日本人にも人気の高い観光地・九份。乗り放題バスを片手に観光バスへ乗り込み、終点である瑞芳駅まで向かった。瑞芳駅でバスを乗り換え、山道を登って九份へ向かう。運賃 15 元を払い、20 分ほどで最寄りの九份老街に到着した。

九份は、日本人の台北ツアーでは行程に組み込まれることが多いメジャーな観光スポットである。事前の情報では、映画「千と千尋の神隠し」の舞台になったとも言われるようなノスタルジックな景観が魅力の観光地とのことであった。原住民文化会館や和平島公園では一度も見かけることのなかった観光客を、九份では大勢見かけることができた。日本人観光客も多く、土産物屋や

飲食店の看板には日本語表記も目立ち、日本語で呼び込む声も耳にした。良くも悪くも観光地として完成している印象を受けた。

国境観光ツアーのコンテンツとしては、通りが狭く、団体行動には不向きな場所であることに留意する必要がある。また、ツアーのターゲットを誰にするかで魅力の度合いが変わってくるだろう。台湾を初めて訪問する人であれば、基隆との組み合わせで行程に組み込んでも受け入れられるだろう。一方、何度も台湾を訪れており、八重山との繋がりに魅力を感じて参加する人には、俗っぽい観光地として受け入れられないものと思料する。



なお、これは後日分かったことであるが、九份のすぐ先にある「金瓜石」は金鉱山で栄えた街で、鉱山跡や黄金博物館、日本統治時代の建物が整備・保存され観光地化しているそうである。炭坑では沖縄の人も多く働いていたようだが、特別に沖縄との繋がりが感じられるものはなく、日本との繋がりを考える上では興味深い観光資源であると言える。

■台北観光の魅力「夜市」

九份を一通り散策した後、九份老街から台北・忠孝復興までの直行バスに乗り、台北へと戻る。九份には宿泊施設が少なく、観光客の多くは台北へと戻るようで、九份から瑞芳までは座れない乗客もいるほどの混雑であった。瑞芳で台北行きの鉄道に乗り換える乗客が降りて以降は車内にも余裕が生まれ、1時間ほどで台北の中心部、そごうデパートのある忠孝復興駅へと到着した。ホテルの最寄りである台北駅までは MRT に乗り換え、18 時過ぎにホテルへと戻った。

台湾の観光魅力の一つに「食」が挙げられる。特に、B 級グルメの宝庫である夜市は台北市内の各所に展開しており、台北観光の大きな観光魅力になっている。前日は遅い到着であり、台湾の夜を堪能することができなかつたため、この日は事前に台北在住の知人に連絡を取り、どこかオススメの夜市を案内してもらう手はずを整えていたものである。

19 時に MRT 中山駅前で待ち合わせ、まずはゆっくりと落ち着いて食べられる料理店へ。「高記」という中華料理店で名物の小籠包などを堪能した。腹八分目で席を立ち、徒歩で寧夏夜市へ向かう。寧夏夜市は、台北市内に 10 程度ある夜市の中では中規模の夜市場であり、全長

300m 程度の道路に約 100 軒の屋台が連なっている「地元民にも観光客にも人気の夜市」だそうである。屋台は食べ歩きが一つの醍醐味であるが、屋台の隣に簡易的な飲食スペースが設けられ座って飲み食いできる店もあり、また屋台が出ている道路の両脇には通常の飲食店も軒を連ねているため、様々なスタイルで楽しむことができるのが特徴である。雨は夜になりだいぶ



小降りになったものの相変わらず降り続いており、その影響か客足は少なめ、営業していない屋台も少なからず見られた。道路脇の飲食店で温かいスープを、屋台で絞ったのゴーヤジュースを堪能した。

夜市は、国境観光ツアーのコンテンツとしても十分に活用可能であると思料する。夜市自体が一般的な台北観光の大きな魅力となっており、八重山との食の比較(例えば、西表島で食べた猪や夜市で飲んだゴーヤなど、共通の食材をそれぞれどのように提供しているのか)という切り口で提供できれば面白いのではないだろうか。課題は共通の食材探しと提供する店探しである。モニターツアーを企画する旅行会社や後述する石垣市の台北駐在員など、ネットワークを活用して数多くある夜市の中から最適なものを絞り込みたい。

4日目(3月5日(木))

■台湾と八重山の交流を研究する台北教育大・何先生

事前調査の最終日、この日は八重山・台湾の繋がりについて知見を有する方にアドバイスをいただくためのヒアリングを予定している。午前中は台湾と八重山の交流について研究する国立台北教育大学・何義麟先生を訪問した。

何先生からはまず、沖縄県教育委員会が発行した『沖縄と台湾』という冊子をご紹介いただいた。写真のとおり、台湾の中の沖縄の繋がりが詳細に紹介されており、沖縄と台湾の繋がりは深いとのこと。特に、台湾で自由に海外旅行できるようになったのは1980年からであり、その前に海外に出ら



れる唯一のチャンスであったのが沖縄・八重山での労働であったというような歴史についてもご教示いただいた。ただ、残念なことにこの冊子にある八重山との繋がりは、今はほとんど残っていないのだそうである（和平島のような沖縄人集落や沖縄女性の遊郭などは各地に点在していたが、現在見所として残っているものは見当たらないと



のこと)。一方、別の切り口として文学・映画の中での繋がりというものもあるとアドバイスいただいた。例えば、4,5年前に公開された『海神家族』という映画では、主人公の妻が沖縄出身という設定なのだそうである。また、『無言的山丘』という90年代に公開された映画では、金瓜石の炭坑が舞台となっており、日本統治時代の鉱山の様子が描かれているのだという。先述のとおり、炭坑では沖縄の人も働いていたが、坑夫としてよりも炭坑にあった遊郭としての方が繋がりが深いようだ。色々とアドバイスいただいたことにお礼を申し上げ、失礼した。

■石垣市の台北駐在員・小笹氏

舛田先生は一足早く昼過ぎの便で帰国するためここで別れ、島田・花松の2名で沖縄県産業振興公社の台北事務所を訪問した。飛行機の都合上、昼休みに訪問することになったが、快く出迎えていただいた。対応いただいたのは石垣市役所から出向中の小笹俊太郎副所長である。石垣市は今年度より台北駐在員として小笹氏を派遣、独自に事務所を構えるかわりに県産業振興公社の台北事務所に出向し、石垣市のPRもあわせて行っているようだ。

小笹氏からは、国境観光ツアーの具体的なアイデアをいくつかいただいた。まず、「音楽」や「踊り」を題材にした両地域の文化の比較である。具体的な候補地として、台北近郊の烏来をご紹介いただいた。烏来は台湾原住民の一つ、タイヤル族が暮らしている街であり、タイヤル族の民族博物館や原住民料理を提供する店などがあるようだ。さらに烏来は温泉地としても評価が高く、北投温泉に匹敵するような温泉リゾートもあるのだという。

また、「食」を題材にした比較は前述のとおりだが、夜市ではなく、「健康・長寿」を切り口にした両地域の食文化の比較も面白いのではないかとのこと。沖縄料理が長寿料理として名高いのは周知の通りだが、台湾にも「素食」というベジタリアン文化があり、健康志向が高いのだという。健康を切り口にすると、温泉やマッサージなども組み込むことが可能であり、八重山においても小浜島では朝の海を見ながらヨガをするようなコンテンツがウケているのだという。

もう一つ、面白い題材として「占い」というのもありではないかとアドバイスいただいた。八重山では今でも病気になると「医者半分ユタ半分」と言われるほどユタが重宝されており、一方で台湾では日常的に占いが盛んであり、様々な人生の選択で占いを活用する人が少なくない。占い文化が根付いた両地域で、それぞれの占いを実際に体験してみるというのも女性には魅力かもしれない。また、占いを切り口にすると、八重山の自然をパワースポットという括りで組み込むこともできそうである。



帰りの飛行機の都合で短時間の面談であったが、非常に有意義な情報交換を行うことができた。国境観光ツアーで想定している東京・大阪から八重山を経由して台北に向かうという行程は、石垣市でも着目していたが、これまで具体的に動き出すことができていないとのことで、今回のような取組は石垣市にとってもウェルカムだということだ。今後、情報交換などを図りながらうまく連携していくことができれば何よりである。

■ 帰路は直接、台北から福岡へ

沖縄県産業振興公社台北事務所を後にし、ホテルに戻り荷物をピックアップした後、基隆行きのバスに乗車した台北西バスターミナル A 棟より桃園空港行きの 14 時 15 分のバスに乗る。運賃は片道 125 円で、所要時間は約 1 時間とのことであったが、昼間は渋滞もなく 45 分程度で桃園空港第 2 ターミナルに到着した。

カウンターでチェックインを済ませた後、ターミナル内のフードコートで遅い昼食を取り、出国手続きを終えたのが 15 時 40 分。急いで土産を買い、16 時 50 分発の中華航空 110 便に搭乗した。台北から福岡までの所要時間は約 2 時間。1 時間の時差を加え、20 時には福岡空港に無事到着した。

スケジュールの都合もあり、駆け足での事前調査となったが、八重山・台湾でのフィールドワークでは両地域に残る独自文化の中からも繋がりを見出すことができ、また関係者へのヒアリングでは八重山・台湾国境観光の新たな切り口が見つかるなど、非常に有意義な 4 日間であった。